

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】堀江未央

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】西南中国におけるラフ族女性の結婚と移動  
—省外漢族男性に嫁ぐ女性たちの語りから

【研究の目的】(400字程度)

1980年代以降の中国において、経済の対外開放と移動規制の緩和は、大量の農村人口を沿海都市部に引きつけ、地域間格差の拡大を進展させている。また、計画生育政策に伴う産児制限は、男児出産を志向する漢族農村部において男女比の不均衡を拡大し続けている。これらは結果として、農村の貧しい漢族男性のあいだに慢性的なヨメ不足を引き起こしている。本研究の目的は、この漢族農村におけるヨメ不足が、西南中国の少数民族女性を配偶者として求める現象を引き起こしていることに着目し、移動する女性たちの語りから女性の移動の経験を明らかにすることである。報告者は、女性の大量流出が起こっている雲南省のミャンマー国境域のラフ族村落で長期フィールドワークを行ってきた。そこで得られた知見とラフ語能力を生かし、ラフの社会から婚出していく女性たちのライフストーリーを収集し、移動の方法や婚出後の社会関係、生家との関わりなどを明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

① ラフ社会における婚姻の変化と民族間結婚に関する研究の公表

これまでラフ村落で行ったフィールドワークによって明らかになった、ラフの村落規範や婚姻慣行、女性の漢族地域への婚出の時代変遷、遠隔地婚出の増加がラフ村落に与えた影響について、積極的に研究発表を行った。2012年10月には東京外国語大学の研究会で、2013年4月には早稲田大学で開催された研究会「仙人の会」で、また2013年6月には文化人類学研究大会にて研究発表を行い、討論を通して考察を深めている。また、2013年11月時点で、雑誌『東南アジア研究』に投稿するための原稿がほぼ完成している。

② 計画生育政策と、漢族農村地域の婚姻に関する文献研究

少数民族の漢族地域への婚出を理解するために、計画生育政策の実態や漢族の婚姻形態、戸籍制度の変遷などに関する文献資料を読み込み、漢族地域における嫁不足の原因を探った。人口センサスや政策文書、漢族の婚姻に関する民族誌などの文献資料から、漢族農村においては1980年代以降婚資と持参金のバランスが大きく変化し、婚資の額が大きく上昇していることが明らかになった。

③ ラフ族女性の婚出先での生活に関する短期フィールドワーク

ラフ女性たちの婚出先での生活を知るために、安徽省や江西省での調査を計画していた。しかし、2012年9月以降、尖閣諸島の国有化などの国際問題が複数回に渡って起こり、これまでにないほどの日中関係の緊張に伴い、調査の延期を余儀なくされた。2013年9月1日から9月20日まで、雲南省のラフ村落での調査を実現できたが、漢族地域に点在して暮らすラフ女性たちに日本人という要素が与える影響を憂慮し、婚出先での調査は断念せざるを得なかった。しかし、ラフ村落の再訪によって、近年大量のラフ女性たちが漢族地域での暮らしを放棄して帰郷しつつある現象が明らかになった。そのため、帰郷した女性たちから、婚出先での暮らしや帰郷の経緯について聞き取りを行った。

④ 博士論文の執筆

上記の調査・研究の内容を統合し、博士論文の執筆を進めている。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

本研究で明らかになったのは、1990年代からラフ女性たちを魅了してきた省外漢族との結婚が、近年では必ずしも最上の選択肢とは言えなくなっている現状である。貧しい地域から豊かな地域への女性の婚出という現象はグローバル・ハイパガミーと言われてきたが、実際には特に配偶者獲得の困難な男性に嫁ぐため、女性たちの生活条件はそれほど向上するとは限らない。また、2006年ごろから雲南省で始まった抵保と呼ばれる補助金や、プーアル茶市場の盛り上がり、サトウキビ栽培による現金収入などによって、ラフ地域と漢族農村とのあいだの経済格差はかつてより少なくなっている。携帯電話の普及や、出稼ぎ暮らしを行うラフ男性の増加に伴い、婚出した女性たちはしばしば生家の家族や同郷の友人たちと連絡を取りあっており、必ずしも孤立した状況にあるとは言えない。さらに、遠隔地婚出の進展はラフ村落においてもヨメ不足を引き起こしているため、女性たちは婚出先での関係に問題を抱えれば、帰郷して新たなラフ男性と再婚するという選択肢が可能になっていることが明らかになった。